

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 25 日現在

機関番号：14501  
 研究種目：研究活動スタート支援  
 研究期間：2010～2011  
 課題番号：22820040  
 研究課題名（和文）コミュニティ音楽における創造性に関する実践的研究-「臨床音楽学」の構築に向けて  
 研究課題名（英文）Practical Research on Creativity in Community Music: Toward construction of clinical musicology  
 研究代表者  
 沼田里衣（NUMATA RII）  
 神戸大学・国際文化科学研究科・協力研究員  
 研究者番号：10585350

## 研究成果の概要（和文）：

障害者を含む様々な参加者のための音楽コミュニティにおいて、音楽の創造性や即興性がどのような役割を果たすのかについて、実践と理論を往復することにより考察した。実践における調査からは、メンバーの異なる参加動機や価値観を捉えることができた。この知見を領域横断的に考察した結果、即興演奏や創造的活動が個人や社会の課題と有機的に結びつき、コミュニティの維持・発展が導かれていることが見いだされた。

## 研究成果の概要（英文）：

This research is to find out the roles of musical creativity and improvisation in musical community for participants with and without disabilities both practically and theoretically.

Through the investigations on the musical practices, we could find out the member's different motivations and values. By examining these findings interdisciplinary, it is suggested that the individual and social problems are realized organically within musical improvisation or creative activities, which will then lead to sustain and further develop the community.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1100	330	1430
2011年度	1100	330	1430
年度			
年度			
年度			
総計	2200	660	2860

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：コミュニティ音楽療法、即興音楽、コミュニティ・アート、臨床音楽学

## 1. 研究開始当初の背景

近年、コミュニティ・アートやその周辺領

域において、新しいアートを創出するというアート側の欲求と、地域住民が主体性を持って参加し、公共性を保ちながらアートを実践

するという社会の側の欲求はますます近接し、せめぎあうようになった。例えば、美術の領域においては社会の問題解決のための活動そのものを作品と見なすような領域が生まれ、一方で行政主導の町づくりやコミュニティ創成を目的としたアートイベントやプロジェクトはますます活発に行われるようになってきている。これらのアート側と社会の側の双方が抱える課題について解決を見いだすために、創造性を重視した実践を行い、そこで得られた知見をもとに「臨床音楽学」の構築に向けて理論展開を試みるのが本研究の主題である。

こうしたコミュニティにおける音楽活動については、音楽教育と関連した「コミュニティ音楽」や、音楽療法に関連した「コミュニティ音楽療法」などの領域があり、それぞれ議論が始まっている。「コミュニティ音楽」については、2004年より国際ジャーナルが発行されているが、まだ実践報告が多くを占めている状況で、コミュニティの目的に即したふさわしい芸術の形態が考えられているかという問題、芸術の創造性がコミュニティ形成にどのように働いているのかという問題などは論述されていない。後者の「コミュニティ音楽療法」の領域では、従来の音楽療法実践に欠けていた社会・文化的側面や政治的側面の重要性が指摘する議論があるが、参加者（クライアント）自身の音楽的価値観をどのように捉えるべきか、という議論は見られない。様々な参加者の音楽の価値観がどのような文脈で参照され、創出され、地域社会の人々と関わるなかで評価され、受容されていくのかなどの検討はまだされていないのである。

一方で、これまでテキストや楽譜を主な研究対象としてきた音楽学においては、パフォーマンスに焦点を当てた研究やその音楽を取り巻く社会・文化的コンテクストを重視した研究など、音楽を「生きた経験」として捉え様々な視角からの議論が展開されている。しかし、不確定な音楽創造の場の生起と社会の関係、美的価値観と障害者の問題など捉えられていない問題は多い。

## 2. 研究の目的

本研究は、創造性を重視したコミュニティ創成のための音楽実践から得られた知見をもとに、「臨床音楽学」の構築の寄与を試みようとするものである。

具体的には、筆者が運営する知的障害者とアーティスト約50名による音楽活動団体「音遊びの会」の活動において、コミュニティ形成・維持について意見を交換しながら展開のための方法論を導き出す。その上で、コミュニティ論や音楽学の処理論をふまえて音楽の価値観とコミュニティ形成や維持の関係

を明らかにする。

## 3. 研究の方法

本研究は、(1) 実践上の課題：障害者を含む音楽グループの調査と、(2) 理論上の課題：臨床から得られた知見をもとに考察することに分けられ、それぞれの課題を往復しながら研究を行うという方法をとる。

(1) 実践上の課題に関しては、筆者が主宰する即興演奏活動グループ「音遊びの会」の活動において、表現内容とコミュニティとしての活動展開に関する話し合いの時間を設け、障害の有無を超えた音楽コミュニティがいかにかに成立・発展可能か実験を行う。この活動場面はビデオ記録し、現象のメモや発言を詳細に書起す。また、メンバーに個別のインタビューを実施し、詳細な参加動機、目的と参加後の価値観の変化を調査する。これらにより、グループ内で音楽の価値観がどのように形成されているのかを明らかにする。

(2) 理論構築に関しては、実践から得られた知見をもとに、音楽療法論、音楽学、音楽教育学、障害学、コミュニティ論などの観点から領域横断的に考察する。

## 4. 研究成果

本研究は、実践上の課題と理論上の課題を往復する方法をとったため、その2点についての成果を以下にまとめる。

(1) 実践においては、知的障害者と音楽家による即興音楽グループ「音遊びの会」の活動を継続して行った。「音遊びの会」では、月二回のワークショップ、年に3、4回の公演活動と広く一般に参加者を募集する公開ワークショップの三つ活動を主に行っている。研究に関連して、まず筆者がこれまで得た知見を「音遊びの会」のメンバー全員に対して発表し、今後の運営方法について考える時間を取った。その後、障害を持つメンバーの保護者と音楽家に対して個別に約2時間程度のインタビューを実施し、会のあり方についての個々の意見を採取、記録した。そこから得られたのは、参加動機や音楽の価値観について個々のばらつきが非常に大きい、個々がそのことを認識した上で、創造性を重視した場を生起するための方法をそれぞれの立場で考えていることである。参加動機や音楽の価値観については、音楽をすることが第一の目的でない場合もあり、また行っている音楽の面白さが全く分からない、という人もいた。どのような音楽がいいのかという共通した見解の一致は見られず、「何がいいのか、といのは言うことができない。いいと思っても即興演奏のためそれが繰り返してできるかは分からないし、状況によっても異なる」といった意見が多く聞かれた。こうした

意見から、「音遊びの会」における音楽活動において、個々の価値観の差異が生き生きとした内容を生み出すのに重要な役割を果たしており、またそれぞれの参加者がそれを認めた上で方法論を模索していることが確認できた。

また、この実践の一つの成果として、「音遊びの会」の活動について、コミュニティ音楽療法のテキストブック“Invitation to Community Music Therapy” (Stige, B. et al., Routledge, 2011) の表紙に写真が掲載され、冒頭に挙げられている世界の6つの事例の一つとして紹介された。

(2) 理論上の課題としては、上記から得られた内容を、コミュニティ音楽療法、アートマネジメント、アウトサイダー・アート、障害学、美術領域における芸術論における議論などを参照して領域横断的に考察した。この内容は、2回の国際学会での発表と国内学会での発表、また論文として投稿した(論文については現在査読中)。下記にその内容をまとめる。

①カナダで開催された第3回国際音楽療法研究学会においては、「コミュニティ活動における即興音楽の意味」というタイトルで、コミュニティ音楽療法の最近の議論、障害学の議論等を参照し、「音遊びの会」の事例を交えて発表した。

20世紀後半頃から盛んに行われるようになったコミュニティ音楽療法の議論においては、従来の音楽療法の文化批判がその活動の動機の一つとなっていることが指摘されている。その反省点とは、療法に関する長所のみを強化していくような考え方や、療法に興味の無い人まで誘い込むような暗黙の共通理解である。(社会学においては、セラピー文化という用語で語られている。)

こうした議論に対して、筆者は障害者独自の視点の確立を目指す障害学の視点、また障害者の作品を美術の一領域として認めようとするアウトサイダー・アートやアウトサイダー・ミュージックにおける議論を参考に、障害者側の視点や価値観をどのように捉えるべきかを考察した。その上で、「音遊びの会」の事例における個々の参加者の変化について紹介し、コミュニティ音楽の実践における即興音楽の意味について、次のように結論づけた。つまり、「創造的音楽活動のプロジェクトを通して、参加者の音楽問題は様々な方法でシェアされるのではないかと、また、またそれは従来セラピストとクライアントの関係だけではなく、より広い関係において考えられるのではないかと」というものである。

②韓国で開催された第13回国際音楽療法学会においては、「福祉か芸術か？-音楽作りのプロジェクトに関する考察」というタイ

トルで、福祉活動ともアート活動とも捉えられる障害者を含む音楽活動の意味について考察した。

最近の音楽療法の議論に、病気や障害を「問題」としてではなく、「資源」と捉える考え方がある。同様に障害学の議論には、障害を持つ人に特異な音楽行為を現代音楽などの例に照らし合わせ、独自の価値観として考えてはどうか、と提案する議論がある。こうした障害に関する社会認識を変えていこうとする議論に関連して、美術の領域では、社会問題の解決そのものを芸術作品とするリレーショナルアートなどと呼ばれる領域があり、議論を巻き起こしている。こうした考えを参考に、「音遊びの会」の実践から得られた知見を交えた上で、音楽療法における「即興音楽療法」や「コミュニティ音楽療法」において音楽がどのように捉えられてきたのか、また今後どのように捉えていくべきか、という流れを次のように説明した。

半世紀ほどにわたって行われてきた即興音楽療法においては、音楽行為は治療の「過程」であると捉えられ、守秘義務に守られた副産物であった。近年盛んに実践されるようになったコミュニティ音楽療法においては、クライアントの状況を取り巻く音楽の「コンテキスト」が重視され、音楽はそれに見合う形で考えられるようになった。最後に、筆者の実践から得られた知見やリレーショナルアートなどに見られる議論からは、過程としての芸術(音楽)そのものが音楽を取り巻くコンテキストを作り出していく、という考え方もできるのではないかと提案した。

③日本音楽学会第62回全国大会では、研究フォーラムにて音楽療法と音楽学(特に新音楽学と呼ばれる領域)の交差する地点に臨床音楽学の構築を模索していることを発表し、他の発表者と意見交換を行った。

臨床音楽学とは、2001年に開催された第5回ヨーロッパ音楽療法学会でイギリスの音楽療法家 G. Ansdell が初めて使った言葉である。彼は、新音楽学と音楽療法の臨床から得られる知見の交差する地点に臨床音楽学を構築できないかと提案した。それまでの音楽療法研究では、音楽学的視点からの研究が少なく、また音楽学的見地から実践を考察するための適切な方法論を見出せていなかった。

音楽療法研究における音楽学の重要性が盛んに議論されるようになったのと同じくコミュニティ音楽療法について議論されるようになったのも、2000年を過ぎたころからであった。この実践は、音楽療法における社会文化や政治的視点の重要性を提起するものであり、音楽、治療、障害や病に関する従来の考え方からの転換を迫るものである。音楽学との関連から見れば、作品分析を主とし

た音楽学研究との豊かな関係が築けず、医学・心理学・教育学等の理論との関連を開拓していた時期を超えて、パフォーマンス理論や音楽社会学等の議論と互恵的な関係を見出しつつある。

筆者が行う実践「音遊びの会」は、即興音楽、特にフリーインプロヴィゼーションにルーツを持つ多くの音楽家をメンバーに持つことが特徴となっている。この会において、個々の音楽表現に対しての承認は、参加者同士の様々な関係によって複雑に行われている。つまり個人の音楽的価値観と、そこに現れる個人的、あるいは社会的課題が、即興演奏や創造的活動を通して互いに刺激され、そうした音楽活動の複層性が会の活動を活性化させ、維持・発展へと導いているのである。

今後、こうした知見をもとに、創造的活動や即興音楽という観点からさらに音楽学的な考察を深めていくことが課題である。

以上、実践上の課題と理論上の課題における成果をまとめたが、こうした考察を深めるために、海外における類似の実践の調査が非常に有益であった。以下2点にその内容をまとめる。

①一つ目は、コミュニティ音楽療法の領域で指導的存在の B. Stige 氏と意見交換し、彼が設立した音楽療法研究所を視察したことである。この際の意見交換において、音楽療法において、心身や成長の問題だけではなく、より「音楽問題」に焦点を当てて考えるべきではないか、という考えに至った。

②二つ目は、ノルウェー、デンマーク、イギリス、ニューヨークのコミュニティ音楽療法の実践を調査訪問することにより、文化背景や社会福祉制度が音楽の内容や価値観そのものにも大きく影響することを実感できたことである。北欧の社会福祉制度の充実には目を見張るものがあったが、整えられた制度ゆえに多様な障害を持つ人が交わる場や、それによって形成される新たな価値観は創出されにくいのではないかと思われた。また、ロンドンとニューヨークの活動においては、様々な文化的背景を持つ参加者がいたが、障害を持つ人の価値観が芸術的観点から理解されている場面はあまり見られなかった。こうした調査により、日本の「音遊びの会」の実践にはその文化土壌が大きく影響していることを、客観的に捉えることができた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計3件)

- ① 中村美亜、三宅博子、沼田里衣、長津結一郎、松井茂、変容する音楽、変容

するフィールド—実践音楽学への挑戦、日本音楽学会第62回全国大会、2011年11月6日、東京大学

- ② 沼田里衣、Welfare or Art?- Discussions on a Music Making Project, 13th World Congress of Music Therapy, 2011年7月8日、Sookmyung Women's University (Korea)

- ③ 沼田里衣、Meaning of Musical Improvisation in Community Activities, Third International Music Therapy Research Congress, 2011年5月27日、Wilfrid Laurier University (Canada)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

沼田里衣 (NUMATA RII)

神戸大学・国際文化科学研究科・協力研究員

研究者番号：10585350

- (2) 研究分担者 なし

- (3) 連携研究者 なし